



情報・研究活動の中枢機能を担う「学術メディアセンター」。



國學院の“和”とコンクリート打ち放しによる“近代”のイメージを織り交ぜた「3号館」。



キャンパスの中心に建てられた18F建ての高層棟「若木タワー」は大学の新たなシンボルタワーだ。





國學院大學は、創立120周年事業として8カ年計画で進めてきた渋谷キャンパス再開発事業を完了。2009年9月に人間開発学部を除く4学部の1・2年生を、横浜のたまプラーザキャンパスから渋谷に移した。

計画当初は建物の耐震性確保が目的で、工場等制限法が適用されていたこともあり、渋谷に本部機能のみを残し、たまプラーザと相模原を活用する案も検討していた。しかし2002年に同法が撤廃され、受験生の間で「國學院＝渋谷」のイメージが浸透しているのに渋谷を離れるのはやはり得策ではないと判断。立地のポテンシャルを最大限に引き出そうと計画が修正さ

れ、渋谷へ回帰し、地域に開かれた都市型大学として新たにスタートすることになった。

2万5000平米と限られた敷地面積に約1万人を収容するため、各棟を機能ごとに分類し、綿密なゾーニング計画を行った。まず、公道を挟んだ3つの敷地から成り立つキャンパスに一体感をもたせるため、歩行路で敷地の中心をつなぐとともに、2つのブリッジとキャンパスモールですべての棟の2Fをつなぎ、公道を横切ることなく移動できるようにした。ゾーニングでは、講義室ゾーンとして、「120周年記念1号館・2号館」「3号館」に講義室をまとめた。メディアゾーンとなる「学術メ

ディアセンター」には、図書館、研究開発推進機構、コンピュータ教室、伝統文化リサーチセンター資料館など、情報発信のための主要機能を集約。厚生ゾーンは、3号館1-2Fの食堂と売店、学術メディアセンターのカフェラウンジとした。「若木タワー」は研究ゾーンと事務・管理ゾーンを兼ね、中・高層階に研究室や大学院の講義室・演習室、低・中層階に事務機能を配置した。

直近3年間の志願者数は増加し続け、オープンキャンパス来場者も着実に増えている。人間開発学部を除く4学部の全学年を渋谷に集約したことで、4年間一貫で授業や課外活動、就職支援などを行える教育効果も期待される。新設した教育開発推進機構は、教育開発・共通教育・学修支援の3つのセンターからなり、FDの推進、「日本語力強化をベースにした社会人力養成プログラム」(GP)を柱に、教養総合カリキュラムの全学的整備、リメディアル教育などを行う。中村大介財務部管財課長は、「入学後のミスマッチを解消しようと、正課と正課外を融合させながら、やりたいことをみつけられるための機会を提供している。一般企業に対しても強い人材を輩出することが生き残り戦略につながる」と語る。（取材・文／本誌 能地）



現代に息づく伝統文化の研究拠点となる「伝統文化リサーチセンター資料館」(学術メディアセンター)。



学生が落ち着いて食事できるように和のテイストで設計された1F食堂(3号館)。



公道の上に通された、3号館と学術メディアセンターをつなぐブリッジ。



主要な事務機能と窓口対応部署を低層階にまとめ、学生の利便性を高めた(若木タワー)。



学生から特に要望の高かったPCコーナーは、30台のパソコンを自由に使えるスペース(3号館)。